
今は勇者もダークサイド寄り

斥侯部隊 隊員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は勇者もダークサイド寄り

【Nコード】

N5520Y

【作者名】

斥侯部隊 隊員

【あらすじ】

ある日突然、青年は勇者として召喚される。魔王討伐を王様に命令され、旅に出るが支度金を握って即逃走。魔王討伐？知るか。報酬の出ない慈善事業をするほど、俺はお人好しじゃないんだぜえ。

——正直者が馬鹿を見、卑怯者が甘い汁を吸う。そんな外道なコンセプトで描かれる、よくわからない物語。 晒し中

召喚？マジ勘弁

目が覚めると、異世界だった。

何番煎じだ、と自分でも突っ込みたくなかったが、そんな使い古されたネタをかまさないや今の状況は理解できなかった。

まず、俺は何故か石でできた円形状の台座にパジャマで寝転んでいる。台座を取り囲むように立っている謎の男達は、そんな俺のパジャマに視線を注いでいた。なにこれこわい。

そして男達の中に紅一点、なんだか綺麗なお嬢さんが俺の股間部分、エクスカリバーが TENT を作っている場所を頬を赤く染めて注視していた。やめる見るな。これは生理現象だ。男はみんな朝起きるとこうなるの。

俺は股間部分の TENT を手で隠しながら、ぼんやりと今の状況を把握し理解した。

——勇者召喚……

ファンタジーな本などでたまに見かける、あのシチュエーションだった。いや股間注視は別として。

取り敢えず、一生懸命 TENT 張りを頑張っている煩惱いっぱいエクスカリバーを宥めつつ、女の人に声を掛ける。

「ここはどこですか」

すると、女の方はやつと俺の股間から視線を外し、ゆつくりと俺の目に合わせてばそぼと答えた。

「メ、メノウ王国の王城です。ま、まあ異世界から来たあなた様はご存じではないと思いますけど……」

知らねえよ。どこだよそこ。もう異世界確定じゃねえか。

「異世界……ね。それにしても、来た、ですか。この状況を見れば、来た、ではなく無理やり連れてきた、の方がしつくりきますね」

まず嫌味を放って反応を見る。

すると女の方は、慌てたように言う。

「ご、ご就寝のところ、こちらの都合で勝手に連れてきたことは謝ります。ですが、我が国はいま未曾有の危機に陥っているのです。すいません、それについては後程お伝えします」

未曾有の危機……魔王の侵攻か何かだろうな、と当たりをつける。

それで、俺に魔王を討伐して来いと王様が何かが命じるんだろう。正直言って、面倒くさい。

そういえば、もし俺が勇者としてここに呼び出されているなら、何か能力っぽいものは無いのだろうか。流石にいくら横暴な王様でも、何の力も持たない一般人を魔王討伐に向かわせはしないだろう。

まあ、それは後で確かめるとして、いつまでこの地下室のよう

な空間にいるんだろうか。それを尋ねると女の方は慌てて、

「いいい今すぐ王様の下へ案内します」

後は……

「もしここが異世界だとして、元の世界には戻れないのですか」

それを訊くと、また女の方は、すいません、と言った。どうやらムリらしい。

はあ、とか返事をしながら、俺はもう逃げる算段を立てていた。

魔王討伐？知るか。何で勝手に呼び出された挙げ句、そんな面倒なことまでせにやなんのだ。

異世界に來たというのなら、自由に生きてやるさ。

+

ここです。少々お待ち下さい。と言い、女の方は恐らく王様が
いるであろう部屋に入っていた。いや、女の方が入っていた扉
を見れば、そこが部屋という言葉に似つかわしくない程大きいこと
が分かった。

一言で表すなら『間』である。恐らく、謁見の間とかそんな感
じだろう。

俺自身は、よくわからない格好をした男達に囲まれるようにし
て扉の前に立っている。

5分程その状態で待っていると、謁見の間（仮）の扉が開いた。そして、中にいた2人の兵士らしき人に、謁見の間（仮）に招き入れられた。

やっと謎の男達から解放された。

謁見の間（仮）に入ると、まず毛の長いカーペットに驚く。なんぞこれ。寝転がりたい。

流石に王様の前でそんなことをするわけにもいかず、足を止めずに周りを小さく見回す。

なんか凄い。壁際の高さ15mくらいの甲冑は、動き出したりしないんだろか。あの壺は高そうだな。思わず叩き割りたい衝動に駆られるわ。

やがて俺は頭を真つ直ぐに向け、玉座にいる王様を見る。でっぷりと肥えた豚みたいな王様のサイドに控えているのは、宰相か何かか。

俺は玉座から十数m程離れたところで、兵士から王様に跪くように言われた。なんでやねん。取り敢えずおっかないから跪くけど、何か屈辱やわあ。

それで王様から告げられたのは、丸々予想通りの言葉だった。要するに、民が困っているから魔王を倒して来いよ、と。

俺は表面上は絶対服従の構えをとっているが、腹の中ではやはり逃げ出す算段を立てていた。

へへー、とか有り難き幸せ、とか言ったら向こうも俺を信用するだろ。俺は向こうを信用しないけど。ヒッヒッヒ。

取り敢えず逃げ出すのは魔王討伐の旅に出してから。恐らく貰えるであろう少ない旅費をパクってしらばっくれてやるぜ。ヤバイなんかワクワクしてきた。

朝食

適当に王様の言葉を聞き流し、眠気によりやってくるあくびを噛み殺す。

なんだかやたらと話が長い。この王様は自分の声を聴けば、俺の士気が上がるとでも思い込んでいるんじゃないだろうか。何か一々上から目線だし。手前の声を聴いても、上がるのは逃走に掛ける思いだけだ。残念だったな。

しかも跪いたままの体勢で、王様の高説（笑）を延々と聴かされ続けるのだ。反感を抱くなと言う方がおかしい。

そのままの体勢で20分くらい王様のお話を聴き、疲れているだろう、との王様の言葉でやっと解放された。

疲れてはいるが、その原因の大半はお前のお話の所為だよ、王サマ。

んで、謁見の間から出ると外で待ち構えていた謎の男達に、着いてきて下さい、と言われた。ヤダ。拒否したい。そう思うも、なんだかやっぱり抵抗できそうになかったから素直に着いていく。

3分程歩いて、到着したのは普通の部屋だった。いや、やたらと豪華で普通ではないけどね。

謎の男達は、ここで寝泊まりして下さい、と言い残して去って行った。

取り敢えず中に入り、扉を閉める。辺りを見回して感嘆する。なんか色々と装飾過多でヤバイ。天蓋付きベッドなんて初めて見たよ俺は。

こ、こ、ここで寝ていいんだろうか。シート汚しただけで城を追放されたりしないかな。それはそれでいいんだが。

おっかなびっくりベッドの感触を確かめるように座る。これはやばい。布団に入れば3秒で寝られる。

ベッドに座ったまま色々考える。

——だがそれは故郷への郷愁の念ではなく、恐らく自分が授かったであろう能力についてだ。

俺が勇者だというのなら、光属性とかそんな感じの力なのではないかと思う。

何かいかにも『勇者』って感じで強そうだ。

そういえば王様が、明日から魔法の訓練を行ってもらったことを言っていた気がする。何だか少し楽しみだ。

いや、一度はファンタジーな世界で俺ツエーをやってみたいと思っていたんだ。

とか、そんな事を考えていると、眠気が再び俺を襲う。この眠

気は耐えられない、そう判断した俺は素早く天蓋付きベッドに潜り込んだ。

ベッドの寝心地はやはり最高で、潜って10秒も経たない内に俺の意識は落ちて行つた。

+

翌朝、知らない人の声に目が覚める。ベッドから降りると、おはようございます、と声を掛けられた。

声のした方を向くと、また謎の装いをした男がいた。だが、今回は集団ではなく1人の様だ。

取り敢えず、おはようございます、と返しておく。

すると男は頷いて、こちらに歩み寄ってきた。よく見ると、男は手に何かを持っている。

男は、俺の前に来るとその何かを差し出した。どうやら、衣服のようであった。着ろ、ということか。

確かに、パジャマとか薄手だし、運動には向いてないからな。

男が部屋から出て行くと、服を床に広げた。

……これは、意図して初代辺りのドラ○エ主人公ルックにしたのではあるまいか。いや、確かに動き易そうだけどね。

一瞬躊躇ったが、やっぱりそれを着ることにした。パジャマよ

りはマシだろう。

丁度着替え終わった頃、廊下から、朝食の準備が整っております、と聞こえてきた。

分かりました、と応えて部屋を出る。外にはやはり謎の男がいた。

「食堂はこちらにございます。着いてきて下さい」

そう促され、仕方なく頷く。お腹空いたしね。

そこで、近くにいた兵士に訊いてみた。
謎の男に連れられてやってきた食堂は、沢山の人で賑わっていた。食堂に入るところで、謎の男とは別れた。

どうしよう。お腹が空いて何かを腹に入れたい気分だが、どこでご飯は貰えるのだろうか。

そこで、近くにいた兵士に訊いてみた。

「すみません、ご飯ってどこで貰えるんですかね」

俺の問いに対して兵士は、

「ああ、そこだよ。てか、もしかしてあんた噂の勇者さん？」

指で指し示し、親切に場所を教えてくれた。

「ありがとうございます。昨日召喚されたのがそうだというのなら、俺は確かに勇者ですね」

そう返すと、兵士は意外そうな顔になる。

「へえ……。あんた、相当肝が据わってんな。普通、召喚されたばかりの勇者ってのは自室に籠もって3日くらい泣いてるもんだぜ」

「……ええ、普通ならそうなるでしょうね。向こうに未練があるなら、きつとその反応が妥当です。俺は、たまたま向こうに未練が無いからこうして構えていられるんです」続けて俺は言う。「それと、やっぱり俺と同じように異世界から召喚されてしまった人がいるんですか？」

そう質問を投げ掛けると、兵士は困ったように頭を掻き言った。

「すまねえ……。その辺は守秘義務が課せられてて言えねえんだ。まあ、守秘義務を課せられていることを喋るのも本当はダメなんだがな」

そういつて兵士は快活に笑う。

「いえ、何から何までありがとうございます」

「いってことよ。困った時はいつでも頼ってくれよな」

何だこの人いい人過ぎる。

「本当にありがとうございます。あの、お名前を伺っても？」

「俺はベム。ベム・ケーリ。あんたは？」

「俺はマサト・ヤマダ……になるのかな、こっちの世界だと」

魔法訓練とは

取り敢えず食堂で朝食を摂った俺は、食堂から出た地点でうろうろと彷徨っていた。

飯は食ったけど、これから何をすればいいんだろう。

そこで挙動不審にしていると、またしても謎の男が現れて、言った。

「朝食は食べましたね？ では行きましょう。次は魔法訓練です」

「魔法、ですか」

「魔法をご存じですか？」

「知っているというか、俺のいた世界では魔法は空想上のものだし、だから、いまいちピンと来なくて……」

そう言う謎の男は、そうですか、取り敢えず着いてくれば解ります、と言って俺に背中を向けてどこかに向かう。俺は慌てて謎の男を追った。

十

俺が謎の男に連れられて来た場所は、外にある訓練場のようなところだった。いや、恐らく訓練場だろう。兵士が剣を交えているのを見れば即座に分かる。

俺も、召喚される前は剣道をやっていて。そこそこ強い方で、県大会で優勝したことも何回がある。

それでも、俺は目の前で闘う兵士に勝てるとは思えなかった。

剣道の戦い方は、実戦向きではない。剣道を習い始めた頃、そう思った。

恐らく、相手が実戦向きの剣を習っていて、それが例え自分より格下でも、俺は確実に負けると言い切れる。

剣道とは、そういう武術だ。

「勇者殿？」

と、いけない。いつの間にか足を止めてしまっていたようだ。謎の男がこちらを怪訝そうな顔で見ている。

「いえ、すいません」

謝罪して、また後を追う。どうやら、魔法訓練とやらはここで行わないらしい。

それからまた少し歩いて、着いたのは屋内だった。体育館を彷彿とさせるような場所である。

広さは一般的な高校の体育館の5倍はある。

そこで、ロープのような物を着た人達が火の玉やら氷の塊やら

を飛ばし合っていた。

縦長の形状の体育館、その壁に沿うように並んだロープの人達が向かい合って『魔法』を撃っている。

「あなたも、今日からここに混じって魔法の訓練をしてもらいます」隣に立っていた謎の男が言って、魔法を撃ち合っている人達に指示を出していたロープ（恐らく隊長かなにか）に向かって歩き出した。

そのまま謎の男は隊長の目の前まで行って、隊長と何事かを交わす。

隊長は、謎の男と話し終わるとこちらに向かって手招きした。来い、ということか。

隊長とかなんか強そうだから逆らわない。俺はよほどの事が無い限り、大きな力には逆らわないのだ。

隊長の前までくると、何かじっと見つめられた。キモい。オッサンに見つめられても抱く感想はそれくらいだ。

「魔力は多いみたいだな」

隊長は俺に言う。

謎の男？また知らん内にどっかに行ってしまったよ。

「そ、そうですね……」

愛想笑いを浮かべて応える。つーか魔力で、よくゲームで見かけるMPとかそんな感じの物か？

面倒だから訊かないけどね。

「君はこれから、私と訓練をしてもらう。魔法を上手く使えるようになる訓練だ」

「はあ……」

そんなことは想定済みである。どうでもいいから早く俺TUEEEEEやらせろよ。

「まず、魔法とは――」

勝手に魔法の講義を始めたオッサン。もうヤダ。

30分後、やっと隊長の魔法講義が終わる。それでは実践だ、と隊長が言い、俺は頷く。

……

『まさかこれ程とは……流石は勇者様だ』

的な展開になるのだろう。非常に楽しみである。

隊長は俺から十数m程距離をとり、魔法を撃ってこい、と言っ

た。

どうやるんだ、と訊くと、手から『血液』を放出するイメージで、と言われた。出来るかボケ。

取り敢えず掌を隊長に向け、目を瞑り掌に意識を集中する。格好は、周りで魔法を撃ち合っている奴らの模倣だ。

とおおお、なんか、掌から出てる気がする。薄らと目を開けると――

――黒いナニかが、にゅっと俺の掌から出てきていた。

魔法訓練とは（後書き）

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます。執筆の際、かなり励みになっております。

感想、誤字脱字指摘など、戴けると嬉しいです。

暴走？

キモい。俺が、掌からでる『黒いナニか』に抱いた感想はこれだった。

俺の掌から依然として出てきていた黒いナニかは細長い形状をとっており、長さが100cm程になると、掌を離れ、存外硬質な音をたてて魔法訓練場の床に落下した。

その形と、落下時の金属質な音から鉄パイプを連想する。

隊長の方を見ると、なにやら驚いた表情でこちらを見ていた。

やがて隊長は驚愕から立ち直ると、こちらに歩み寄ってきた。

どうしたんですか、と訊くと、流石は勇者様だ、と言われた。これ何のネタっすか。

隊長の話によると、いま俺が出した黒い鉄パイプモドキは、極端に使い手が少ない闇魔法なのだという。闇魔法は非常に強力で、光魔法なんかは及びもつかないとか。曰く、最強。

闇魔法が最強たる所以は、魔法を打ち消す力があるのと、魔力を固化して変幻自在に操れるからと。

早くも俺無双フラグか？ 万単位の軍勢に俺1人で突っ込んでいくビジョンが脳裏に浮かび、ぶるりと身震いする。

冗談じゃない。俺の鶏心チキンハートがそんな刺激に耐えられるワケが無い。

俺がそんなことを考えていると、隊長は

「その棒を変形させてみてくれ」

と、鉄パイプモドキを指差して言った。どうやるんだと訊くと、頭の中でイメージしろ、と言われた。

変形、変形といっても、何にすればいいんだろうか。ただ形を変えるだけだから何でもいいのか。

よし決めた。『刀』にしよう。

頭の中で、いつかじいちゃんが見せてくれた模擬刀をイメージする。あれは綺麗だった。刃引きは切っ先だけされておらず、かなり鋭かった。

イメージを固めると、黒い鉄パイプモドキを頭の中で刀の形状にする。すると――

――床に落ちていた鉄パイプモドキは、うねうねと蠢き形を変える。最初はなんだかよくわからない形状だったが、徐々にそれは、確実に刀へと形を変えていた。

完全に鉄パイプモドキの動きが止まったとき、そこにあったのは、あの模擬刀そのままだった。色は黒いままだけどね。

「これは……凄いな」

隊長はなにやら感嘆の声を漏らしている。いや、俺もびっくりしたよ。

「……これ、持ってみていいですか」

隊長に訊いてみた。だって、刀は男の浪漫だもの。

隊長は頷き了承の意を示した。

震える手で、黒い刀を拾う。

そのとき、急に体から何かが抜けていく感覚が俺を襲った。俺の感覚と反比例するように、刀の雰囲気は力強さを増した。

「なん……だ……？」

吸われている。明らかに剣に何かを持っていかれている。魔力とやら、だろうか。

「くっ……」

刀から手が離せない。指を動かしたいだけなのに、全身の筋肉が動かない。

刀は、どんどん存在感を増していき、なにか刀身に黒い霧のようなものまでまとわりつき始めた。

このままじゃヤバイ。死ぬかもしれない。

ふっ、と意識が遠くなる。

死んでたまるか、と俺は思う。

いきなり剣と魔法のファンタジーな世界に召喚されて、今のところは自由も利かない。やっとファンタジーの片鱗を垣間見たと思ったら、次の瞬間には死にかけている。

死んでたまるか。その思いだけで意識を必死につなぎ止めた。

隊長は、どうする事もできない、と凄く申し訳なさそうな顔でこちらを見ていた。

周りで魔法訓練をしていた連中も、手を止めて俺を見ている。

死にたくない。死にたくないけど、どうしようもない。状況を、打開できない。

そう考える間にも、どんどん俺は力を刀に吸われていく。

ぼんやりとしか働かない頭で、ある策を思い付いた。今の状況を見れば不可能に近いが、やらないよりはマシだ。

刀を持っていない方の手から、にゆる、となけなしの魔力で作った闇の触手を出す。もう、残っている魔力は殆どない。

その触手を手から離れないように伸ばしていき、刀に近付ける。刀の纏う霧に触手が触れた瞬間、触手ごと魔力を吸い取ろうとするような力が襲う。だが、吸い取れない。吸い取らせない。

逆に触手をホースのようにして、刀が纏う霧を吸い取る。はは

っ、出来たぜ。

頼りない魔力で作られた触手は、霧を吸い取ったことで強度を増した。そのまま刀に触手を触れさせる。

——お！？ ヤバい、思った以上に刀の力が強い。このままじゃ、さっきの繰り返しだ。

刀に消されるかに見えた触手は、意外と拮抗している。もう俺は、手から魔力を吸収されていなかった。

「おおおおおお！！」

俺は気合いの声を上げた。

そのとき、絶妙なパワーバランスを保っていた触手と刀は、均衡を崩し僅かに触手が刀の魔力を吸収した。

触手は奪い取った魔力分だけ強さを増し、刀より優勢になる。

それから触手が、刀の魔力を吸い尽くすのに、あまり時間は掛からなかった。こうして俺は、九死に一生を得た。

魔力制御（前書き）

ちよつと勇者育成編に作者が飽きてしまいましたので、さくつと進めたいと思います。

魔力制御

周りから、歓声が挙がる。

ぬうう、こう言っちゃ悪いが、たったいま黒い模擬刀を必死の思いで消した俺はかなり疲れていて、正直この歓声は迷惑以外の何物でもない。

「大丈夫か!？」

流石に歓声は挙げなかった隊長が、声を掛けてきた。

「……ええ。ですが、なんだか疲れしました。何なんですか、あれは」

俺が訊ねると、隊長は申し訳なさそうな顔になって答えた。

「闇魔法の暴走だ。……すまん、まだ魔力の制御も出来ない内にやらせる事ではなかった……。完全に私の失態だ」

そうだ、お前の所為だ。危うく死にかけたぞ。どう責任とってくれるんだ。

「あなたの所為ではありません。僕の過ぎた好奇心から起きた事故ですから。そんなに気負わないでください」

真っ黒な腹の中を隠し、笑顔が素敵な好青年を演じる。愛想笑いなら誰にも負けない自信がある。

隊長は、目を潤ませて言った。

「ゆ、勇者様あ」

キモい。マジで誰得。オッサンのこんな顔見たくなかった。

オッサンフラグが立ったかもしれん。脱出する前に押し折っておかなければ。

「その魔力制御とやらができれば、今のは暴走しないんですか？」

「あ、ああ」

よしやろう魔力制御。今すぐやろう。

「魔力制御を教えてください」

「しかし、君は今死にかけたんだぞ。危険では――」

「お願いします、教えてください。魔王に蹂躪されるこの国の国民の事を思うと、何かしなくてはられないんです」

真っ赤な嘘である。蹂躪されているのかどうかも知らん。

しかし隊長は、俺の心意気（爆笑）にいたく感激した様子で、結局教えてくれる事になった。

魔力制御訓練開始3時間後、俺は完全に魔力を制御出来る様になっていた。周りから、流石は勇者様だ、とか聞こえた気がしたがきつと幻聴だ。

そして、再び挑戦するのは例の模擬刀。今ならいける気がする。掌を前方に向け、集中する。やがて、またしても棒状の闇魔法が、にゅ、と飛び出す。

それを100cm程の所で意図的に切り、さっきの鉄パイプモドキと全く同じ形状にした。

鉄パイプモドキが床に落ちたのを確認すると、また模擬刀を頭に思い浮かべる。

鉄パイプモドキはまたしても奇怪な動きをして、黒い刀の形状に落ち着いた。

「今度こそ……」

ゆっくりと刀を床から拾う。

ぐっ、と魔力を持っていかれそうになるが、耐える。

魔力を全く持っていない事を確認した。

「やりました……！」

俺は感極まった様子で呟く。いや、内心は見た目程感激してな

いよ。

おお、とまた周囲からどよめきが起こる。隊長に至っては涙を流しながら「ご立派になられた」とか言っていた。隊長ウザい、ウザ過ぎる。

それから夜になるまでずっと刀で遊んでいた。そこで得た教訓は、魔力を使い過ぎると疲れる、ということだった。

ということで、俺はベッドの中に入ると泥の様に眠った。

十

次の朝、またしても謎の男に起こされた俺は着替えて食堂へ向かった。

食堂に着いて、飯を貰いにいく。なんか少し、ブローラーの様な気分になったが気にしない。

飯を貰ってなるべく人のいない席に着いた。そこでそれが与えられた仕事であるように、もそもそと飯を食べていると、隣の席に見覚えのある青年が座った。

「おはようございます。ベムさん」

見知った顔で、恩人なので声を掛けた。するとベムさんは、にかっ、と笑って俺に応えた。

「よう、マサト。昨日ぶり」

そう言ってベムさんは自分の料理に手をつける。グラトコロルスとかいう大層な名前の料理だったが、ただの卵と挽肉のそぼろ丼である。

ベムさんと色んな話をしながらグラトコロルスを食べた。ベムさんは聞き上手で、俺は故郷の日本の事を少し話した。だが、日本の科学技術などの事には触れなかった。下手な事を言って、科学技術が軍事転用されても困るしね。可能性は低いだろうけど、ここは異世界なのだ。慎重にならなければ。

飯を食い終わると、自らの足で魔法訓練場に向かった。今日は何をするんだろうか。

魔法訓練場に着くと、隊長に何か物凄く歓迎された。来なければよかった、と心底思った。

今日はどうかやら、細かな闇魔法の制御と、闇以外の魔法の訓練をするようだった。

隊長に手取り足取り魔法を教えてもらった。おかげで、闇魔法での『殺し』のテクニクや、炎と雷の魔法が少し使える様になった。なんか今なら国を相手に喧嘩出来そうな気がする。面倒だからやらないが。

そして部屋に戻り泥の様に眠……れなかった。部屋の扉がノッ

クされたのだ。

非常に面倒だが、仕方ない。扉を開けて、ノックの主を見る。

またしても、謎の男だった。

男は、この世界の宗教観やら軽い地理の説明、この世界の通貨、常識などを俺の頭に詰め込んで去って行った。何だったんだ一体……

次の日、俺は王様に呼び出された。

魔力制御（後書き）

モンハンの二次創作が書きたい。

冷酷無比な鬼畜ガンナーに憧れます。

真っ黒な誓い（前書き）

ちよつと遅くなりました。更新速度の向上はキツそうです。

真っ黒な誓い

現在、俺がいるのは謁見の間だ。今俺は、存在することに幾分の価値も見出だせない様な豚（もとい王様）に跪いている。

豚の背後には、精悍な顔立ちの青年と、ローブ姿の銀髪的美少女、修道服を着た蒼い髪の美女が控えている。

とうとう来たらしい。

——俺の魔王討伐の旅、その出発式。

豚の後ろにいる3人は旅のお供か。余計ことしやがって。逃げるにくなるだろうが、このぶたやろう。

そんな俺の心の中の悪態は届くハズもなく、豚はたらたらと長ったらしい口上を垂れている。やってらんね。

「王様」

面倒になった俺は、王様の話を途中で遮った。これくらい、今の俺の実力を鑑みれば許される事だ。

「どうした、勇者殿」

王様は特に気分を害した様子もなく聞き返してきた。

「お話の途中、大変申し訳ないのですが、私は今すぐに旅に出たいです。迫害されている民を想うと、いてもたってもいられないのです」

言外に、早く式をやめろ、と言っている。

「おお、勇者殿、そこまで我が国の民の事を……。余は感動した。では直ぐにでも旅に出てもらいたいが、暫し待たれい。いくら勇者殿とて、1人で魔王に挑むのは無謀だ。そこで、我が国からも優れた使い手を魔王討伐に参加させようと思う。……おい、フラット、シス、カーディ、勇者殿に自己紹介をしろ」

豚が言つと、豚の後ろに控えていた3人は俺の前に歩み出てきた。そして、精悍な顔立ちの青年が口を開く。

「フラット・ジョゼンだ。一緒に魔王討伐へ行く事になった。歳は17。よろしく」

「マサト・ヤマダ。歳は17。こちらこそよろしく」

そう言つて握手する。

フラットは、かなりやる気に満ちあふれている。俺の苦手なタイプだ。

次に、修道服を着た女性が口を開いた。

「カーディ・アコライトよ。僧侶をしているわ。歳は22。よろしく」

「「こちら」そよろしく」

そう言つて、握手。

次は、銀髪の美少女である。

「……シス・ライオネ」

実に無表情に、実に淡白に、実に気だるげにシスという少女は自分の名だけを告げた。

いや、やる気のありすぎる奴は苦手だが、こいつは酷いだろう。

協調性とか絶対に皆無だ。明らかにコミュ障だよ。

まあ、魔王とやり合うつもりがない俺としては嬉しい限りだが。

「よろしく」

笑顔で言うが手は差し出さない。どうせ握り返してこないで俺が恥かくんだから。

「準備は出来たか、勇者殿」

「ええ」

豚の問いかけに応える。

「城から出た所に馬車がある。フラットが馬車を扱えるから、それ

に乗って旅をすればよろう」

「ありがとうございます」

ちよつと待て。

——支度金は？

……嘘だろ、無一文で城の外に放り出す気か？

と、思ったら、僧侶のオネエサンが金を受け取っていた。まあいいや。取り敢えず預けとこう。

謁見の間から出て、城の外に向かう。城の廊下を、恐らく短い付き合いになるだろうお供達と歩きながら、俺は昨日謎の男に教えてもらったこの世界の金の単位を思い出していた。

——寝る間際だったのでうる覚えだが、たしか

『基本的にこの世界には硬貨しかありません。銅や銀だと複製される可能性がある、金だと作製にコストがかかるので、硬貨には特殊な金属が使用されています。なので、硬貨の製法を知っている者はほとんどいません。単位は

赤 ↓ 1 円（日本円換算）
橙 ↓ 5 0 円
黄 ↓ 1 0 0 円
緑 ↓ 5 0 0 円
黒 ↓ 7 5 0 円
銀 ↓ 1 5 0 0 円
金 ↓ 5 0 0 0 円
白 ↓ 2 0 0 0 0 円
『

…… だったかな。

硬貨には色が着いていて、色によって単位が違うそうなの。小切手なんかもあるらしい。

考え事をしていたら、城の外に出ていた。

俺は金持ちになることを、異世界の抜けるような青空に誓い、1人ほくそ笑んで馬車の幌をくぐるのだった。

真っ黒な誓い（後書き）

なんかこのまま更新速度が下がっていきそうで怖いです。精進せねば。

推測（前書き）

ちよつと早く投稿できました。

推測

馬車に揺られて2時間、ようやく俺＋お供は、メノウ王国を出た。それなりに大きい道を通ったとき、勇者の出発だというのに城下町の人々の反応は醒めたものだった。まるで見慣れた光景を見つめるような、そんな反応。馬車の中のお供（シスを除く）の態度は、申し訳なさそうな感じである。

この様子から推測するに、やはり勇者というのは何度も召喚されているのだろう。何度も召喚されているということは、魔王は倒される度に短い周期でリポップ（再発）するか、もしくは――魔王に挑んだ勇者は全て魔王に倒された、従属させられたかだろう。

そして、俺という使い捨て殺戮マシン（勇者）が利用されることにフラットとカーディとやらは罪悪感を感じている、と。

……どうでもいいな。歴代の勇者が殺されていようといまいと、俺はこの世界で俺TUEEEEEEEするだけだ。

「魔物だッ!!」

その時、1人御者台にいるフラットの怒声が響いた。

幌から顔だけを出し、前方を確認する。成る程、馬車の100mぐらい先に虎のような生物が3匹いた。だが虎ではない。虎の尻尾は2本もないし、牙もあんなに長くない。

ということだ、

「フラット、お願いします」

前衛に丸投げした。

何も考えなしに行かせたわけではない。恐らくあの性格からフラットは好戦的だろう。だから嬉々として向かうハズ。

案の定、フラットは剣を片手に飛び出して行った。勇者のお供というからには、あんなモブっぽい奴に負けることはないだろう。

幌の中に首を戻すと、僧侶のカーデイが苦笑いしていた。

「勇者さん……あんな意外と酷いわね」

それには答えず、ただにつこりと笑う。喋るのが面倒臭い。

「どんな魔物だったの？」

またカーデイが訊いてきた。ちょっと煩い。

「虎みたいなやつですよ。尻尾が2本あるやつ。それが3匹いました」

カーデイの顔が固まる。

「ちょ、ちょっと、それってツインテールタイガーじゃない!? フラット!?!」

いきなりカーディは叫ぶと、馬車を飛び出していった。危ない魔物らしい。あのカーディの様子では、フラットはもう生きて無いかもしれん。ちょうどいい。このままカーディも死んでくれんかな。

やがて外から悲鳴が聞こえてきた。フラット、カーディ、無念。

馬がやられちゃ厄介なので、虎を倒さなければ。

シスをちらりと見やると、興味なさげにしていた。ドライ過ぎる。

また幌から顔を出し、虎をみる。虎の後ろに見える赤いのは俺の所為じゃない。あいつらが勝手に飛び出していったんだ。

……虎の影に視線を集中し、そこから闇魔法を使う。影と夜は全て俺の支配域である。

虎は、影から飛び出した闇の杭に貫かれ、3体とも絶命した。

止まっている馬車から降り、ツインテールタイガーの亡骸の下へ向かう。魔物の素材は売れるらしい。

肉とかではなく、毛とか牙とか。

牙だけ取るのは面倒なので、闇魔法で首ごと刈り取る。首3つをリュックサックに入れて、カーディの遺体の腰（恐らく）に括り付けてある袋を拾う。ひっひっひ、金だ、お金ちゃんだ、うひひ。

ほくほく顔で馬車に戻る。豊作じゃ、豊作。

幌をくぐり、馬車の中に入った。シスは、やはり無表情で興味なさげだった。

……こいつは殺さなくても大丈夫か。

俺は、メノウ王国に密告されることを恐れている。カーディやフラットののような魔王討伐に乗り気な奴は、俺が逃げ出したら間違いないメノウ王国に密告するだろう。それは困る。行く先々の国で俺がお尋ね者なんかになってしまう可能性が、なきにしも非ず。

フラットとカーディは、ここで死ななくともいつか機会をみて殺すつもりだった。俺の自由な異世界ライフを邪魔する奴は、如何なる手段を用いても突破する。

血に染まったりユックサックをその辺に放り、どっかりと腰を降ろす。

——あ、御者いないじゃん。

重大な事実が気が付いた。

推測（後書き）

フラットとカーディには消えていただきました。

移動手段（前書き）

ちょっと遅れましたね（汗）

短いですが、楽しんで頂けたら幸いです。

移動手段

「御者がいない……だと……」

俺は、動かない馬車の中で呟いた。現在、馬車に搭乗しているのは俺とシスの2人だ。

「……」

シスは、やはり無表情に無言を貫いている。なんだか、身動きもしない姿を見ると、人形かと思ってしまう。時折目瞬きしているから、恐らく人間だろう。

「シスさんは、御者って出来ます？」

返答がこないのを承知で尋ねる。

「……」

やはり返答はなし。

どうしよう。馬車が動かないからって、歩くのも面倒だ。

俺が黙考していると、

「……ねえ」

シスから声を掛けられた。しかし不意打ち気味だったので、怯

んで返答が遅れる。

「……どうかしました？」

「……あなたは、本当に勇者？」

………どういう意味だろう。質問の意図を図りかねる。

「……あなたからは、魔王と相對する意志が感じられない」

そういう事か。つまり俺が国に従順な勇者を装っていることに気付いた、と。

シスも、フラットとカーディが死んだ事には気付いただろう。そして、フラットとカーディを殺したツインテールタイガーを一瞬で仕留め、首を刳り取って、カーディが持っているはずの金が入った袋を持ってほくほくしてればイヤでも気付く。

「ああ、俺は魔王を倒すつもりなんて毛頭ないよ」

言葉遣いも、野暮ったい敬語は止めた。

「なあ、俺の今の言葉を聞いて、お前はどう行動する？ 王様に密告するか？ それとも、勇者が魔王にやられた事にして城に戻るか？ 前者なら俺はお前を生かしておけないがな」

「……私は、あの国に戻るつもりはない」

シスはきつぱりと言った。

俺の脅しに屈したワケではないだろう。 なにかあの国によくない思い出があるのか。

「なあ」

俺はシスに声を掛けた。 訊きたいことがあったのだ。

「先代の勇者は、どうした」

「……魔王になった」

はーん。 成る程。

「民衆には？」

「……勇者と魔王が相討ち、と伝えられた」

そうだろうな。

民衆の耳に心地よいように、そんな話になったんだろう。

勇者が魔王になっただなんて民衆に伝わったら、民衆の勇者召喚に対する目は、今のものより冷たくなるだろう。 最悪、勇者召喚をという制度も無くなるかもしれない。 そうすると、魔王に対抗出来る者がいなくなり国が滅びる、と。

「まあ、いい。 取り敢えず目下の問題は移動手段だ。 馬車を動かさないからには、徒歩しかない訳だが」

夜営テントなどを背負って歩くのは、かなり辛いだろう。さらに、虎の頭が3つもあるのだ。くそ、フラット何故死んだし。

「……」

シスが急に立ち上がった。そして、シスの近くにあった、袋に包んであるテントを掴むとおもむろに何も無い空間に『放り込んだ』。

……ファンタジーばねえ。

消えたのだ、テントが。何もない空間に。

「……」

シスは無言で虎の頭の入ったリュックサックを指差した。リュックサックを渡すと、それもシスの手によって虚空に消えた。

……もう一度言う。ファンタジーばねえ。

ともあれ、これで選択肢に徒歩が増えた。まあこれしかないんだが。

取り敢えずの目標は、街に着くこと。そう考え、俺とシスは馬車を降りて砂利がむき出しの街道を踏みしめるのだった。

移動手段（後書き）

感想など頂けると作者のモチベーションが上がり、あなたに（恐らく）幸運が訪れます。

奴隸（前書き）

奴隸タグ付けておいた方がいいですよね……

奴隷

大分日が傾いてきた。

俺とシスは、馬車を降りてからずっと歩き続けていた。

時折出てくる魔物も、闇魔法ではなく雷の魔法で蹴散らしている。

「結構、日が暮れてきたな。今日は行けるとこまで行こう」

シスに話し掛けるが、相槌は打ってくれるものの、相変わらずの無口無表情。

それから2時間ほど歩き辺りが真っ暗になった頃、俺が夜営しよう、と切り出した。

シスは頷くと、何もない空間からテントを取り出した。何の魔法だろうか。激しく知りたい。

食料などは、テントの袋にテントと一緒に入っていた。

街道から少し外れて、テントを設置する。昔、何回かキャンプに出掛けたことがあったので、案外簡単にテントを組み立てられた。

馬車を解体してシスの魔法で持ってきた木材を少し出して、俺の火の魔法で点火する。即席の焚き火の完成である。念のため言うておくが、馬は食肉にはせず、適当に放しておいた。

固いパンと干し肉を食べ、これまたテントの袋に入っていた水筒から水を飲んで、寝た。俺は外で、シスはテントの中で、だ。うすーく夜の闇に100mくらい俺の闇魔法を広げ、それを索敵範囲とした。時折索敵範囲に魔物が入ってくるため、その都度俺が起きて魔物を殺した。7度目に起きた頃、空が白み始めていたため、闇魔法を解き、シスを起こす。寝顔を見て、少し見惚れてしまったのは秘密だ。

またパンと干し肉と水という簡素な食事を済ませ、テントを畳んで出発した。

出発してから3時間頃、街道を歩いていると後方から馬車が走って来るのが見えた。

丁度いい。30分くらい気付かない振りをして歩いていると、馬車が俺達に追い付いた。

そこそこ大きい馬車である。商人の馬車か。

「乗せてくれないか」

白い硬貨（約2万円）を指で弄りながら御者に声を掛けた。

御者はこちらを見ると（正確には俺の手元）、ゆっくりと馬車を停止させた。

「どこまでだ」

「近くの街まで」

御者に白い硬貨を渡して荷台に乗り込む。

「おい、その女まで乗せるとは言っていないぞ」

御者がシスを指差して言う。クソが。さすがに商人か。抜け目がない。

「護衛がいらないようだ。魔物に襲われたらどうするんだ」

商人に応えず、俺は言った。

「先ほど、雇った護衛は魔物に襲われて全滅した」

「なら、こいつは乗賃の代わりに護衛。それでいいだろう」

俺の答えに商人は満足したようだった。ハナから、このつもりだったのだろう。

「少し臭いが、我慢してくれ」

商人が言う。何か臭う物に乗せているのだろうか。

馬車の幌をくぐると、それは明らかになった。

「奴隷、か」

金属製の檻の中に、手錠と足枷をされた人間が5人いた。この臭いは、この人達の体臭と垂れ流しの糞尿だと思い至る。

文化レベルが中世並みのこの世界では合法なのだろうが、やはり奴隷の非合法とされている世界から来た俺としては生理的な嫌悪を隠しきれない。

できるだけ檻から離れて、腰を降ろす。俺の隣にシスが座った。

奴隷達は、ボロ布を纏い、虚ろな表情で座っている。俺とそう年の変わらない女の子がいて、感情では助けたいと訴えている。それは不純な下心からくる物で、俺はその感情を強く抑えつけた。

「シス、奴隷つてのは、どういう経緯があってなるモンなんだ？」

気になって訊いてみた。

「……大体は借金のカタ。あとは口減らし、犯罪者などがなる」

成る程、まあ、そんなところか。

しかし、シスは話し掛ければ答えてくれるようになった。何故だろうか。

……臭い。なんだこの臭いは。奴隷の身体くらい洗っておけよ。

馬車に乗って、奴隷達の臭いにも慣れたころ商人が、街が見えて来た、と言った。案外早いな。徒歩とは違うのだよ、徒歩とは。

取り敢えず街に着いてからの目標は、冒険ギルドとやらに加盟し金稼ぎだな。

ちらりと、シスの方を見る。

——できれば、この少女とは離れたくない。損得勘定なしに、純粹に、そう思った。自分らしくない事は自覚している。ここに召喚される前は、自分の周りには打算で付き合っている友人しかいなかった。全て利己的な考えの末、生まれた交友関係だった。

だけど、どういう訳かこの少女とはもっと、純粹で潔白な関係を持ちたいと思った。

——惚れたのかもしれない。やはりガラにもなく、そう思った。

奴隷（後書き）

主人公が効率のみで動くつまらないので、惚れさせてみました

盗賊（前書き）

感想やお気に入り登録、ありがとうございます。

いつの間にか1万PVも突破し、やっと軌道に乗ってきたかな、なんて思ったりしてます。

盗賊

商人は、街が見えた、と言ったが、それはかなり遠目に見えるだけであって、実際は馬車でも明日にならなきや着かないような距離であつた。

俺は隣の、頭1つ分くらい低い銀色の頭頂部を見た。

自分は恐らく、この無口で銀髪の少女——シスに恋をした。

何故、と訊かれても、巧く答えられない。しちまったモンはしちまったってことである。

銀色の髪をじっと見つめていたら、突然シスが立ち上がったかと思うと、馬車の外に出て行ってしまった。いつの間にか馬車も停まっていた。

なんだ、と思って馬車の幌から顔を出すと、後方100mくらいに一台馬車が迫ってきていた。

しかし、様子がおかしい。馬車の屋根から一本旗が伸びていて、旗にはおっかない髑髏のロゴがプリント(?)してある。そう、まるで海賊が掲げるような旗であつた。

商人がそれを見て呟く。

——ハゲドモ盗賊団、と。

モブ確定であつた。

「強いのか？」

商人に訊いてみる。すると、商人は少し驚いた顔で

「ハゲドモ盗賊団を知らんのか。……あいつらは冒険者崩れの集まりで、ここらでは最強の盗賊だ。倒せば報奨金が出る。好んで人殺しはしないが、物資は迷わず略奪する。奴らに狙われたら、確実に破産、というのが商人の間での通説だ」

ほー。そんな強いのか。

というか、そんな奴らと戦つて大丈夫なのか、シスは。

馬車から、下卑た笑いを浮かべて7人の屈強そうな男が降りて来た。そして案の定——全員、スキンヘッドであつた。

なんだあいつら。ギャグ要員だと思えないんだが。

男達は、シスの姿を認めると下卑た笑いを更に深くした。

「アニキ、こいつあ上玉ですぜえ。こいつを頭に捧げれば、俺達の幹部入りもそう遠くねえ話なんじゃねえですかい」

言っている事が思い切り小物である。本当に強いんだろうか。

男達と対峙して、最初に仕掛けたのはシスであつた。

シスはその場から一步も動かずに、腕を軽く振るつた。

それだけの動作で周囲の気温が下がり、シスの周りに無数の氷柱が発生する。

そして

「行け」

シスが短く命令を発すると、氷柱は全て男達に殺到した。

これで男達は全滅、すと思ったが――

『ぬんっ』

気合いの声を挙げ、スキンヘッド全員が『サイドチェスト』。全て弾かれる氷弾。

……え、何アレ。馬鹿なの？死ぬの？

肉体1つで、魔法弾くとかチートだろ。あいつらの肉体はどんな物質で構築されてんだ。

またシスが動いた。次は人差し指の指先から高圧縮された水を放出する魔法である。反動とか気にしたら負けである。

が、それだけ強力な魔法を撃たれても、スキンヘッド達はピンピンしている。

どうやら、今のがシスの出せる最大火力だったようで、魔力を使い果たしたのかその場で棒立ちになってしまった。

そして、ニヤニヤしながらシスに近づくとスキンヘッド達。

スキンヘッドの1人が、シスに手を伸ばしかけたその時、

バチイ！！

シスに触ろうとしていたスキンヘッドの体が、ゆっくりと後ろに倒れる。原因は、強力な雷の魔法。そのスキンヘッドの顔は、かなりの高電圧に当てられたため黒く焦げていた。

倒れた奴以外の6人のスキンヘッドは、魔法の放たれた方向を確認した。

スキンヘッド達が見たのは

「調子乗んなよ、カス共」

歯を剥き出しにして嗤う、俺の姿だっただろう。

俺は軽く手を振るった。あんな脳筋共、これだけで十分だ。

やったことは、シスの技と同じ。俺の周囲に無数の高電圧雷球が浮かび、バチバチと音をたてている。

「レッツラゴー」

俺は雷球に命令を下す。無数の雷球は、我先にとスキンヘッド共に殺到した。

雷球を撃ち終わり、閃光と轟音が止んだ。スキンヘッドがいた所には、黒いナニかが転がっていた。かつてのスキンヘッドは、ただの炭へとジョブチェンジしたのだ。

「大丈夫か」

そう言葉を掛け、シスに近づく。

シスは俺の方に振り返った。

その顔はいつものような無表情ではなく、若干戸惑いが浮かんでいた。

「……どうして？」

シスは俺に問うた。

「どうして今助けたの？ あそこで私を助けなければ、あなたにとつての『密告者』の可能性を完全に消す事が出来た。今までの行動から鑑みるに、別に私があそこで男達に連れて行かれても、あなたは特に何も思わないでしょう？」

おっと。非常に答えづらい疑問だ。

まあ、シスがスキンヘッドに触れられそうになった時、結構自分の事のように怒ってた気がするからな。そりゃ疑問も抱くか。

その問いには敢えて答えず、馬車に戻るぞ、と一言言ってシスに背中を向けた。

シスも魔力切れで少しフラフラしながら、後を着いてくる。

俺は賞金首のスキンヘッド共（恐らく生きている）を商人に任せ馬車の幌をくぐった。

盗賊（後書き）

次回は明日投稿したいと思います。

夜に遭遇（前書き）

今回はかなり短いです。

夜に遭遇

商人は、髑髏のロゴがプリントされた旗を持って馬車に戻って来た。

この旗を冒険者ギルドとやらに見せると、盗賊を倒したことになるんだとか。

だったら盗賊生かしとく意味なかったじゃん、とか思ったけど、あの様子ではその内魔物に食われて終わりだろう。

シスは、またいつもの無表情に戻っていた。可愛い。頬擦りしたい。

……おっと。

つい内なる欲求が。

商人にはえらく感謝された。報奨金は全額くれるという。当たり前前だ。

シスと一緒に馬車に揺られていると、夜になった。一度俺とシスは馬車を降りて夜営の準備を始めた。また簡素な食事を取り、横になる。商人も自分で小型のテントを張って夜営していた。やはり商人もこちらに負けず劣らず質素な食事だった。

食事を終えた商人は、こちらに来て、言った。

「見張りは立てないんだな」

寝ようとしている所に来るものだからちょっとイラッときて、ぶっきらぼうに返す。

「優秀なモンでね」

「そうか。あのハゲドモ盗賊団を倒したんだ。大丈夫だと思うが、気は張っておいてくれよ。ここは稀に下級の龍種が出るんだ」

下級とはいえ、龍と言うからには強いんだろう。

安心しろ。夜なら俺は例え魔王にすら負けないからな。いや慢心とかではなく事実だ。

例のごとく闇魔法を薄く広げて索敵。今夜も忙しくなりそうだ。

商人は、落ち着き払った俺の態度から、大丈夫というのを悟ったらしく、自分のテントに戻って行った。

そして俺の意識も、暖かい毛布に包まった瞬間、ゆっくりと沈んで行った。

索敵範囲に何か引つ掛かった。毛布を名残惜しむ身体を無理やり起こし、今まで何度魔物が索敵に掛かったか思い出す。

——今夜は5回引つ掛かったため、これで6回目。かなり眠いが、安眠しているシスの為だと思えば頑張れる。

空はまだ暗く、沢山の星がキラキラと輝いている。まだ夜は明けなさそうである。

索敵に掛かったのは1体。そこそ大きい。商人の言っていた龍種とやらか。

見てみたい、と思った。今までは、その場から動かずに少し魔物に意識して串刺しにしていたが、龍種と言うのがどういう格好なのか興味を持った。

立ち上がり、龍のいる方へ歩き出す。

70m程歩き、俺の目に飛び込んで来たのはまさしく、『龍』だった。10m程の細長い蛇のような形状の体軀をうねらせ、こちらを見据えている。

確かに、商人が念を押す程の威圧感と強者の気配はする。だが、それだけ。夜を支配する俺の敵では無かった。

興味を失い、腕をけだるげに振るう。眠い。早く殺して寝よう。

龍は無数の闇の杭に貫かれ、断末魔の叫びを挙げることもなく絶命した。

適当に鱗と角を闇魔法で剥ぎ取り、寢床に戻——ろつとして商人の馬車が目に留まる。

今はかなり寒い。

ふと、馬車の中の奴隷の事が気になった。

だが、そんな考えを頭を振り思考から追い出す。あの中には犯罪者もいるかもしれないのだ。だとしたら、いま馬車の中で凍えているのも当然の報い。俺のふざけた偽善で同情などするべきではない。

自分の寢床に戻り、毛布をかぶる。そして、再び俺の意識は浅く沈んでいくのだった。

夜に遭遇（後書き）

次回は長くするつもり、です。

次は月曜に更新したいな。

失恋からの（前書き）

やってしまった……

月曜に投稿するとか言っておきながら、まさかの連日投稿……

すいません……

失恋からの

昨夜は魔物が8度襲って来た。内一回は下級の龍種であった。

目が覚めると、空は白み始めていて、いそいそと闇魔法を回収する。明るい中ほっとくと、すぐに魔力が無くなるのだ。

近くに落ちている龍の鱗と角を拾い、シスの所へ行く。

テントに入ると、シスはまだ寝ていて、思わず隣に寝てしまいたくなる衝動に駆られるが、ぐっと堪える。

「起きろ、シス」

安らかな表情で眠るシスに声を掛け、起こす。

いま気付いたが、長旅で一度も風呂に入っていないにもかかわらずシスは全然臭わなかった。

なんかそういう魔法でもあるのだろうか。

シスは目を擦りながら起き上がると俺の方へ顔を向け、言った。

「……………おはよう」

バカ……………。今まで自分から話し掛けるコトなんて、ほとんど無かったのに、朝の挨拶だとうー！！

不意討ちだ。無表情の挨拶に、鼻血を噴きそうになりながらも必死に返す。

「お、おはよう……」

シスの無表情に一瞬疑問めいた感情が浮かぶが、すぐに消え失せいつもの無表情に戻る。

テントをてきぱきと片付け、シスと共にまたパンとチーズの貧しい食卓を囲む。ああ、肉が食いたい。

朝食を食べ終わり、馬車の方へ向かう。馬車にはもう商人が乗っていて、準備万端という風情だった。

「遅いぞ。あと5分遅かったら、お前らを置いていく所だった」

商人がそんなコトを言う。ふざけてんのか、こいつは。

「料金は前払いしてんだ。俺達が多少遅くても、お前には俺達に合わせる義務がある。そこどころ、忘れてもらっちゃ困る」

そう言つて、龍の角を見せる。

「俺の運ぶ『商品』は鮮度が命だ。だから、出来るだけ早く……おい、お前、それは龍の角か？」

商人が驚きの表情を見せる。

「ああ、夜に狙われたからな。返り討ちにしてやった」

俺がドヤ顔で言うと、商人は改まって

「なあ、お前俺の専属護衛にならないか？ 勿論、報酬は破格だ。いい話じゃないか？」

「断らせて貰うよ。この馬車は臭くて堪らん」

勧誘は適当に流して、馬車の出発を促す。

商人は、残念だ、と言いながら前を向いた。俺達は馬車の荷台に乗り込んだ。

漸く、長かった旅も終わり、目的とする街、『ハイアン』へ着いた。その街は、昔読んでいたとある漫画に出てくる街を彷彿とさせる造りだった。その漫画では、巨人と呼ばれる脅威の存在から『壁』の内の街にすることで身を守っていた。

それと同じだ、と思った。ただ、その脅威が巨人から魔物に置き換わっただけである。

俺達が着いた街は、強固そうな壁に囲まれた、どこか閉鎖的な雰囲気漂う街だった。

実は、メノウ王国とかもそうだったらしいが（というか殆どの街や国が）魔物から住民を護るために壁に囲まれているという。メノウ王国のは、ずっと馬車の中にいたから気付かなかった。

街の入り口は、特に検問やらがある訳でもなく、普通に開いた門から入った。

街の内部は、外からは想像も出来ない程賑わいがあつた。

「じゃ、俺達はこちらで」

と言つて、馬車から降りる。

商人は頷くと、

「もし奴隷が必要になったら、『ヘリムーア奴隷商会』をご贖員に」

と言つて、馬車で去つて行つた。

俺はシスに向き直ると、

「これで街に着いた訳だけど、これからはどう行動する？ 別れて行動するか？ それとも……」

シスに問う。

「共に行動するか？」

俺がそう言つても、シスは表情を変えることはせず、やはり淡泊に、こう告げた。

「……別れて行動する」

——俺の胸を、息苦しさが襲う。

悲しい、と思った。

この銀髪の少女の為に、色々やった。一緒に馬車の護衛をしたり、夜の見張りをしたり。裏切られた、ような気分になった。

でも、この好意は勝手なモノだし、押し付けてはいけないと思う。

そう割り切り、内心は表面に出さずに、シスに伝える。

「そうか。この街にいたら、また会うこともあるかもな」

そう言っ、腰に括り付けた袋から白い硬貨を5枚程取出し、シスに差し出す。

「これまで色々教えて貰ったからな。その報酬だ。」

「……」

シスは無言で硬貨を受け取ると、俺に背を向けて、去って行った。

……………失恋、って、こんな気分なんかな。

シスの遠くなる背中を見ながら、俺はそんなことを考えた。

頭を振るい、そんな考えを思考から追い出す。

いま考えるべきコトは、そんなことではない。俺には、金が必要だ。いまシスに白い硬貨を5枚も渡してしまったせいで、所持金は物凄く少ない。仕方ない。男とは見栄を張りたがる生き物なのだ。宿に泊まれそんな金はあるものの、かなり短い期間しか泊まらないと思われる。

そして飯まで食ったら、恐らく、無一文。

そんなおぞましい想像に身震いする。

そこでふと気付く。

虎の頭、龍の鱗と角が、未だにシスの手元に在ることに。

やってしまった、と頭を抱える。あれが今のところ、唯一の資金源だったのだ。

だが、なんだかわざわざ追い掛けるのも男らしくない。おまけに、失恋（だと俺は思っている）までしているのだ。尚更、追い掛け難い。

となれば、働くしかない。

——いや、あるじゃないか、ファンタジーの王道仕事斡旋所、『冒険者ギルド』が。

俺は、訪れた金の気配に失恋のことを少し忘れて、人知れずほくそ笑むのだった。

俺はいま、冒険者ギルドの建物の前に来ている。

あの後、適当に通行人を捕まえて冒険者ギルドまでの道程を教えてもらい、散々迷った挙げ句、今に至る。

——それにしても、冒険者ギルドの建物は、俺の想像していたものと変わらなかった。

木材のみで造られた建物。

剣が交差しているイメージが写された看板。

建物の中から漂ってくる酒の臭いと喧騒。

全てが、俺のイメージしていたものと同じだった。

俺は、進学して、初めて登校する学生のような感情を胸に抱き

ながら、冒険者ギルドのドアをくぐった。

失恋からの（後書き）

感想、誤字脱字指摘など、頂けると嬉しいです

ギルド（前書き）

なんか毎日投稿みたいになってますが、いつまでこのペースが続く
か分かりません。

ある日いきなり不定期更新に戻るやも……

ギルド

ボタン、と、後ろで扉が閉まる。

その音に反応して、数名の顔を赤くしたガタイの良い男たちがこちらを見た。俺はそちらを一瞥すると、受付と思われる場所にスタスタと歩み寄る。

「冒険者ギルドに登録したいのですが……」

受付の女の人に声を掛ける。勿論、愛想笑いを浮かべて。

「はい、冒険者登録でしたら、こちらの紙に貴方の情報をご記入下さい」

そうして、羽ペンと紙を受け取り、漢字で記入する。以前、謎の男にこの世界のあれこれを教えて貰ったとき、日本の文字が共通文字だと教わったのだ。

「はい」

受付嬢に紙とペンを渡す。

「マサト・ヤマダさんですね。主な使用武器は剣、得意属性は炎・雷、と」

使用武器を剣にしたのは特に深い理由はない。

闇は、ある事情から書くことはしなかった。

事情とは、

『勇者様は闇魔法を使うらしいですね。闇魔法は強大です。それ故に一部の地域では邪の象徴として扱われる事があります。なので、その闇魔法は出来るだけ隠しながら魔王を倒して下さい』

と、謎の男に言われた為である。

俺の闇魔法は知られると色々厄介らしい。だから伏せたのだ。

まあいい。俺は炎と雷だけでも十分強い部類に入る。

「それでは、ギルドの簡潔な説明をさせて頂きます」

「お願いします」

「冒険者ギルドというのは、基本的に何でも屋です。依頼という形で、ギルドにお金を払い仕事を頼むのが依頼者、その仕事をギルドから斡旋され、こなすのが冒険者となります。ここまで大丈夫ですか？」

「大丈夫です。続けて下さい」

「冒険者は、ギルドからどんな依頼でも斡旋されるという訳ではありません。強い魔物に駆け出しの冒険者が勝てる可能性は限りなく低いので。その為、冒険者の強さを簡単に表す『ランク』というのが出来ました。ギルドは、そのランクを基準に冒険者に仕事を斡旋するのです」

「なるほど」

「ランクには、G、F、E、D、C、B、A、S、Xがあります。Gが最低、Xが最高ランクとなっております。ランクを上げるには、一定数の仕事を成功し、ギルドにその力量を示すことで上げる事が出来ます。仕事を成功すれば、ギルドに認められ報酬も貰えます。失敗すれば、違約金を取られギルドからの印象も落ちます。報酬は、やはり高ランクの仕事が格段に高いですね。ギルドの概要はまあ、こんな所ですね。長々と申し訳ありません」

「いえ。色々ありがとうございます」

「マサト様は、新規のご登録ですのでGランクとなります」

「では、早速依頼を受けたいのですが、いまGランクで魔物討伐系の依頼はありますか？」

「はい、こちらになります」

受付嬢はカウンターの下から冊子を取り出し提示する。

「ゴブリン、コボルト、ピクシー、スライム……ちなみに、ランクを上げるのには幾つ依頼をこなせばいいのですか？」

「マサト様の1つ上、FランクになるにはGランクの依頼を3つ成功すると上がれます」

「では、スライム、コボルト、ゴブリンの依頼を受けたいのですが」

「わかりました。では、こちらのカードを無くさないで下さい」

そう言って渡された物は、名刺程の大きさの金属のプレートだった。プレートの表面には、大きく『G』の文字が刻んであった。

「こちらのカードは、依頼の受理状況が記録されています。過去に受けた依頼も記録されていますので、その冒険者の細かな力量等も測る事が出来ます」

「わかりました」

「いまそのカードには、マサト様の情報と、ゴブリン、スライム、コボルトの依頼の受理状況が記録されています。その魔物を倒せば自動的にプレートに討伐状況が記録されるので、依頼の偽装は出来ませんよ」

釘を刺された。まあ、こんなに一度に依頼を受けたのだから当然か。

受付嬢に礼を言い、依頼を達成すべくギルドの外に出る。すると、

「おい、小僧おお、お前え、目が合っておきながら俺サマを無視するとはあ、いい度胸だなあ……」

後ろを振り向くと、

まあ、案の定というか、酔ったガタイのいい男に俺は絡まれていた。

ギルド（後書き）

評価者数が結構増えてきて、作者は常に狂喜乱舞しています。

感想とかも、ユーザーではない方からも頂けると嬉しいです。

次回も明日投稿します。

初依頼（前書き）

ちよつと、日間ランキング一桁で、総合評価1000突破で、俺は夢でも見ているんですかね。

初依頼

俺がこの建物に入った時に、俺のことを見ていた奴だ。

どうやら、目が合って何の反応が無いのがお気に召さなかったらしい。所謂、構ってちゃん、という物ではないだろうか。

どうでもいいが、酒臭い。近づかないで欲しい。

「なんだあ、お前え、よく見たらあ、傷の1つもねえじゃねえかあ。とんだ温室育ちだぜえ」

温室育ちなのは否定しないが、いい加減離れて欲しい。

「すいません、僕の態度で気分を害してしまったのなら謝ります。いま、先を急いでますので」

すると男は、何故か更に機嫌が悪くなったようだった。

「お前え、俺サマを無視しておいてえ、無事に帰れるとお、思っ
んのかあ」

なんだこいつ、ハゲドモに次ぐモブじゃないのか。

対応が面倒になったので、男を無視して街の出口に向かう。すると、

「そおかあ、あくまでも俺サマをお、無視するんだなあ。決めたぞ

お、お前は死刑だあ」

男は何やら喚きたてている。だがそれを敢えて無視して先を急ぐ俺。クールだぜえ。

「聞いて驚けえ、俺サマはあ、あの有名なＣランク冒険者、グラン様だぞあ」

Ｃランクか。そこそこ稼いでるんだろうな。べ、別に羨ましいんだからね！ うん、我ながら意味不明だ。

そのＣランク男は、余程無視されるのが気に食わないのか、悔し紛れに俺を追い掛けて来た。何故そうなる。

俺は魔力は高いが、体力は一般高校生のそれと同じだ。よって、逃げる事はせず迎え撃つ事にした。

男は短刀を構えて襲いかかってくる。俺はかなり手加減した雷の魔法を右手に溜めて――、

結局、その魔法を使う事はなかった。

理由は、俺の前に立つ黒髪の女の人。この女の人が、拳の一撃で男を沈めてしまったのだ。

俺は、右手の雷の魔法をキャンセルし、女の人に礼を言った。

「危ない所、助けて頂いてありがとうございます」

すると、女の方は振り返り、

「どういたしまして。それにしても、よくCランクと聞いて迎え撃とうとしていたな。君は見たところ、新人じゃないか」

「ええ、まあ」

とか適当に誤魔化し、

「失礼ですが、お名前を伺っても？」

「ああ、私はアンリ・オーフェンだ。君は？」

「マサト・ヤマダです。強いんですね、アンリさんは」

黒髪、黒瞳、どこか日本人に似た顔立ちの美女である。

「はは、私はこれでもAランクだからな」

苦笑してアンリは言った。

「本当にありがとうございます。……あの、その男の方は」

俺はグランとやらを指差して、言った。

「ああ、適当にここに放っておけばいいだろう」

「すみません、ろくなお礼も出来なくて」

「いや、いいさ。私の勝手にやった事だからな。それよりいいのか、先を急いでいるのでは？」

「そうでした。では、これで」

女の人に頭を下げて、街の出口に向かう。この依頼を今日中に終わらせて、宿代を作らなければいけないのだ。ここで油を売って、
いてはダメだな。

街の出口から出て、そこから続く街道から外れる。近くの森に、
ゴブリンが群れを為しているらしい。

森の名前は、クローク森林。浅い所には薬草等が生えていて、
基本的には安全な場所である。そこにゴブリンが出てきた、冒険者、
助けて！！ ということらしい。

依頼は、ゴブリンを8体討伐で成功、報酬は白硬貨2枚。追加
で倒すと、1体につき銀硬貨（1500円）くれるらしい。これは
頑張らねば。

街を出て1時間程歩くと、クローク森林の入り口に着いた。森
の浅い所は、背の低い木が多く、日の光が遮られることはないよう
だ。

森に入り、適当に辺りを散策する。

残念だ。暗ければ、俺の闇魔法でちゃちゃっと終わらせられる

のに。こつも明るくては、自分の足で探すしかない。

森の中に入って5分程、依然として歩き続けている俺の耳に、何者かの話し声が聞こえてきた。

聞き耳をたててみると、それはどうやら日本語ではないことが分かった。

足音を忍ばせて、声のする方へ向かう。そこには――

――数匹のゴブリンが、棍棒を手に何かを話し合っていた。

初依頼（後書き）

日間ランキング入りしたのも、皆さんのお蔭です!!

拙作ですが、見捨てないでやってくれると嬉しいです!!

あと、晒しスレのおまいらありがとう!! 勇気が出たぜ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520y/>

今は勇者もダークサイド寄り

2011年12月19日18時00分発行